

マルコによる福音書 8 章 1 節～10 節

2016 年 7 月 28 日

古本 靖久

1、聖歌 260 番 「主の食卓を囲み」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 76 ページ）

4、テキストの位置

今回の箇所は、「4000 人の供食（給食）」とも呼ばれている箇所です。6 章 30～44 節には「5000 人の供食」物語がありました。

同じような出来事が一つの福音書の中に二度出てくるわけですから、5000 人の供食物語があれだけ強烈な印象をもたらしたのに、どうしてももう一度書く必要があったのでしょうか。

| | | |
|----------|---------|-------------|
| 福音は外の世界へ | 6:6b-13 | 弟子たちの派遣 |
| | 6:14-29 | 洗礼者ヨハネ、殺される |
| | 6:30-44 | 食事の奇跡 |
| | 6:45-52 | 水の上の顕現物語 |
| | 6:53-56 | まとめの句 |
| | 7:1-13 | 父祖たちの伝承とは |
| | 7:14-23 | 旧約聖書の食物規定 |
| | 7:24-30 | 福音は異邦人の元にも |
| | 7:31-37 | 異邦人の地でのいやし |
| | 8:1-10 | 二度目の供食物語 |

最初に 5000 人の供食と 4000 人の供食の内容を比較してみて、各節ごとの内容に入っていきたいと思います。

<共通点>

- ・イエス様は群衆を憐れんだ
（飼い主のいない羊のような有様を深く憐み／群衆がかわいそうだ）
- ・弟子たちは困惑する
（わたしたちが…食べさせるのですか／いったいどこから…できるのでしょうか）
- ・パンを裂く
- ・食べて満腹する（すべての人／人々）
- ・パンの屑を集める

<違う点>

- ・5000 人では弟子がイエス様に提案するが、4000 人ではイエス様が主導権をもつ
- ・群衆はどこから来たか（すべての町／遠くから来ている者もいる）
- ・群衆がいた時間（時間もだいたいぶたつた／三日）
- ・パンの数（5 つ／7 つ） ・魚の数（2 匹／少し）
- ・人数（5000 人／4000 人） ・祝福と感謝
- ・4000 人では魚は別に祈る ・4000 人では魚の残りは集められない

5、節ごとに

◆二度目の供食物語

8:1 そのころ、また（大勢の）群衆が大勢いて、何も食べる物が（持って）なかったの
で、イエス（彼）は弟子たちを呼び寄せて（彼らに）言われた（う）。

今回の物語の場所は、聖書には明示されていません。しかしイエス様がティルスでシリア・
フェニキアの女性の娘をいやし、デカポリスで耳が聞こえず舌の回らない人をいやした記事
に続いていることから、この物語は異邦人の地、あるいは異邦人が多くいる場所で起こった
と考えることができます。

イエス様がそこで何をしていたのか、また何を求めて群衆が集まっていたのか、ここには
何も書かれていません。しかしそのような中で、イエス様は弟子たちを呼び寄せます。

8:2 「(わたしはこの) 群衆がかわいそうだ (を憐れむ)。もう三日 (間) もわたしと一緒
にいるのに、(何も) 食べ物が (を) 持っていない。

イエス様は群衆を見て憐れみます。この語はもともと「内臓がよじれるように痛む」とい
う意味で、相手の痛みや悲しみ、苦しみを、自分も同じように感じるということです。そし
て聖書の中では、イエス様か神さま、そして善いサマリア人にしか使われていません。群衆
の思いをすべて抱え込むイエス様の姿がここに見られます。

5000 人の供食の時には、群衆が「飼い主のいない羊のような有様」を憐れみ、イエス様は
教え始めました。しかしここでは、群衆の肉体的な飢えを憐れんでいます。この三日間、イ
エス様と共にいた群衆の欠乏を感じておられたのです。

群衆は途中で帰ることもできたでしょう。しかし群衆はイエス様の元に留まり続けまし
た。それほどまでに、イエス様は人々を惹きつけました。しかしイエス様が見てもわかるほ
ど、群衆は飢えていました。

8:3 (もしも彼らを)空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れ(弱り)きってしまうだろう。(そして彼らの)中には遠くから来ている者もいる。」

前の供食物語では、弟子たちが「群衆を解散させてください」と願いました。しかし今回は、イエス様がすべての主導権を握っています。弟子たちは呼び寄せられただけでした。

前回の群衆は、「すべての町からそこに一斉に駆けつけ」た人たちでした。この「すべて」の中に含まれるのは、ユダヤ人だけです。しかし今回は違います。異邦人が多くいる場所で、さらに「遠くから来ている者」までいたわけです。

このまま帰すわけにはいけない、それがイエス様の思いでした。その思いをイエス様は弟子たちに伝えます。

8:4 (そして彼の)弟子たちは(彼に)答えた。「こんな人里離れた所(荒野)で、いったいどこからパンを手に入れて、これだけ(ら)の人(たち)に十分食べさせることができるでしょうか。」

この弟子たちの問いは、当然のものだといえるでしょう。しかしほんの少し前に、5000人にわずかなパンと魚を分けられたイエス様の奇跡に参加していたことを考えると、とてもおかしい問いだともいえます。

ある学者は、二つの供食物語はもともと同じ出来事であり、それが違う言い伝えになったと言います。しかし8章19~21節で、イエス様はこのように言っています。

わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは、「十二です」と言った。「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うと、イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

このようにイエス様は、二つの出来事をきちんと覚えておくようにと弟子たちに伝えます。このことから、二つの出来事は別々のものだったと考えることができます。

ではなぜ、弟子たちはこのような問いをイエス様にしたのでしょうか。それは弟子たちが、物質的なレベルで、つまり人間的なレベルでしか物事をとらえることができなかつたからです。福音書はこの弟子たちの無理解を強調しているのです。

だから供食物語は二度、書かれる必要があったのです。

8:5 (そして) イエス (彼) が (彼らに) 「パンは (を) 幾つあ (持って) いるか」とお尋ねになると、弟子たち (彼ら) は、「七つあります」と言った。

パンの数が前回よりも 2 個多かったとしても、数千人の前では何の足しにもなりません。ところでこの 7 という数に、意味を持たせようとした人たちがいました。例えばルカによる福音書 10 章 1 節にある「72 人を派遣する」という記事ですが、写本によっては「70 人」になっているものもあります。

創世記では地上には 70 の民族があったとされていることから、そのすべての地に派遣するという意味で 70 という数字を使ったというのです。

したがってこの 7 という数は、世界の民族を意識させる数字なのです。つまり 異邦人に対する業が、ここでは強調されている というのです。一方 5 という数字は、モーセ五書、つまりユダヤ人に与えられたものを意味します。

8:6 そこで、イエス (彼) は地面に座るように群衆に命じ、(そして) 七つのパンを取り、感謝の祈りを唱えて (して) これを裂き、人々に配るようにと弟子たちにお渡しになった (て配らせた)。(そして) 弟子たち (彼ら) は群衆に配った。

さらにこの場面も、異邦人を意識していると考えられます。5000 人の供食の時、イエス様はパンを祝福しました。これはヘブライ人の家長がおこなうもので、ユダヤ教の食事の儀式といえる行為でした。

しかし今回は祝福ではなく、感謝します。この行為は、ギリシアなど異邦人世界の中でおこなわれていたものです。つまりイエス様が感謝したということは、これらの行為が異邦人の前でおこなわれたということでもあるのです。

8:7 また、小さい魚が少しあったので、賛美の祈りを唱えて (祝福して)、それも配るようにと言われた。

今回の少しの魚は、パンとは別に扱われます。これはすでに福音書が書かれた時代におこなわれていた聖餐式の影響があるのではないかとされています。聖餐式ではパンを大事にするため、魚とは引き離しているのです。

今回も配るのは弟子たちの役目です。イエス様が感謝し、祝福なされたものを隣の人に配っていく、これは現在のわたしたちの役目でもあるのです。

8:8 (そして) 人々は食べて満腹したが、(。) 残ったパンの屑 (の残り物) を集めると、七籠になった (集めた)。

マルコは今回も、大勢の人々が食べて満腹したという事実を強調します。これは単に、自分の家に帰り着くまでの間、空腹に耐えられるようにという一時的なものではありませんでした。心も体も満足する豊かなものだったことでしょう。

聖書には、食卓を囲む場面が多く出てきます。神の国とは、食事を共に分かち合い、皆が満たされる場所ではないでしょうか。わたしたちが大切にしている聖餐式も、実はこの神の国の先取りなのです。



前回の物語では、籠の数は 12 でした。これは弟子の数と同じでした。ではこの 7 は何でしょうか。使徒言行録 6 章 1 節から書かれている、食事の世話をする 7 人の弟子(ギリシア語では執事の意味)だと考える人もいます。

8:9 およそ四千人の人がいた。(そして) イエス (彼) は彼らを解散させられた。

そして今回の 4000 人は、「東西南北の四方を意味する」だとする人がいます。だから全世界に、福音は届けられていくというのです。

8:10 それからすぐに、(彼の) 弟子たちと共に舟に乗って、ダルマヌタの地方 (地域) に行かれた。

ダルマヌタという地方がどこなのか、はっきりとしていません。しかしガリラヤ湖の西側であると考えられています。一説には、マグダラの書き間違いではないかともいわれています。

マルコ福音書は 4000 人の供食物語がガリラヤ湖の東岸でおこなわれたことを報告します。そして舟に乗って、またユダヤ人の町へと戻っていくのです。

<今日の箇所から>

先日、同志社大学のチャペルで、お話する機会が与えられました。そのとき選んだ聖書箇所は、ヨハネによる福音書 6 章 1 節～15 節の「5000 人の供食」でした。

そのときには、5000 人で一斉に食事をする場面を思い起こし、少年が持ってきたわずかなものを用いてくださるイエス様の行為に目を向けながら、こんなわたしたちも必要とされていることを中心に語りました。

しかし今回の場面においては、二つのことが強調されているように思います。まず一つは、イエス様の業が異邦人の世界にも広がっていったということです。前々回の箇所でイエス様は、シリア・フェニキアの女性と対話しました。そのときに彼女は、「食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます」と言いました。

ユダヤ人に与えられたパンの屑を異邦人は食べてもよいはず、そう言った彼女の言葉が、今、4000 人の供食物語において実現したのです。そしてそれは、わたしたちの間にも、神の国の食卓が広がっていくことを意味していたのです。

そしてもう一つは、弟子たちがイエス様のことを理解できないでいる姿です。弟子たちは何度イエス様の不思議な業を見せられても、イエス様のことを本当にわかることはできませんでした。

この弟子たちの姿を見て、わたしたちはあきれられるでしょうか。それともホッとするのでしょうか。イエス様のことを本当に理解できるのは、いったいいつなのでしょう。

弟子たちは、イエス様の十字架の場面に従うことができませんでした。しかし最終的にはイエス様のために、その身をささげていきました。それは復活のイエス様に出会ったからです。福音書は何度となく、イエス様のことを理解できない弟子たちの姿を描きます。それは裏を返せば、復活のイエス様に出会わない限り、イエス様がどのようなお方なのかはわからないということの意味しているのです。

わたしたちも頭だけでイエス様を理解することはできません。しかし祈り、賛美し、聖餐にあずかり、復活のイエス様に出会うならば、その目が開かれるのです。イエス様が共にいてくださることを、わたしたちは知るのでした。

今回の学びはこれで終わります。次回は 8 月 25 日(木)10 時 30 分からです。「ファリサイ派の人々と」(マルコ 8 : 11～21) について学んでいきます。